

主日礼拝説教「手に入れること、手放すこと」 予稿

日本基督教団石神井教会 2026年9月6日

【旧約聖書日課】列王記上 21章1～7節

¹これらの出来事の後のことである。イズレエルの人ナボトは、イズレエルにぶどう畑を持っていた。畑はサマリアの王アハブの宮殿のそばにあった。²アハブはナボトに話を持ちかけた。「お前のぶどう畑を譲ってくれ。わたしの宮殿のすぐ隣にあるので、それをわたしの菜園にしたい。その代わり、お前にはもっと良いぶどう畑を与えよう。もし望むなら、それに相当する代金を銀で支払ってもよい。」³ナボトはアハブに、「先祖から伝わる嗣業の土地を譲ることなど、主にかけてわたしにはできません」と言った。⁴アハブは、イズレエルの人ナボトが、「先祖から伝わる嗣業の土地を譲ることはできない」と言ったその言葉に機嫌を損ね、腹を立てて宮殿に帰って行った。寝台に横たわった彼は顔を背け、食事も取らなかった。⁵妻のイゼベルが来て、「どうしてそんなに御機嫌が悪く、食事もなさらないのですか」と尋ねると、⁶彼は妻に語った。「イズレエルの人ナボトに、彼のぶどう畑をわたしに銀で買い取らせるか、あるいは望むなら代わりの畑と取り替えさせるか、いずれにしても譲ってくれと申し入れたが、畑は譲れないと言うのだ。」⁷妻のイゼベルは王に言った。「今イスラエルを支配しているのはあなたです。起きて食事をし、元気を出してください。わたしがイズレエルの人ナボトのぶどう畑を手に入れてあげましょう。」

【使徒書日課】ガラテヤの信徒への手紙 1章1～10節

¹人々からでもなく、人を通してでもなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中から復活させた父である神とによって使徒とされたパウロ、²ならびに、わたしと一緒にいる兄弟一同から、ガラテヤ地方の諸教会へ。³わたしたちの父である神と、主イエス・キリストの恵みと平和が、あなたがたにあるように。⁴キリストは、わたしたちの神であり父である方の御心に従い、この悪の世からわたしたちを救い出そうとして、御自身をわたしたちの罪のために献げてくださったのです。⁵わたしたちの神であり父である方に世々限りなく栄光がありますように、アーメン。

⁶キリストの恵みへ招いてくださった方から、あなたがたがこんなにも早く離れて、ほかの福音に乗り換えようとしていることに、わたしはあきれ果てています。⁷ほかの福音といっても、もう一つ別の福音があるわけではなく、ある人々があなたがたを惑わし、キリストの福音を覆そうとしているにすぎないのです。⁸しかし、たとえわたしたち自身であれ、天使であれ、わたしたちがあなたがたに告げ知らせたものに反する福音を告げ知らせようとするならば、呪われるがよい。⁹わたしたちが前にも言っておいたように、今また、わたしは繰り返して言います。あなたがたが受けたものに反する福音を告げ知らせる者がいれば、呪われるがよい。¹⁰こんなことを言って、今わたしは人に取り入ろうとしているのでしょうか。それとも、神に取り入ろうとしているのでしょうか。あるいは、何とかして人の気に入ろうとあくせくしているのでしょうか。もし、今なお人の気に入ろうとしているなら、わたしはキリストの僕ではありません。

【福音書日課】 マルコによる福音書 12章35～44節

³⁵イエスは神殿の境内で教えていたとき、こう言われた。「どうして律法学者たちは、『メシアはダビデの子だ』と言うのか。³⁶ダビデ自身が聖霊を受けて言っている。

『主は、わたしの主にお告げになった。』

「わたしの右の座に着きなさい。

わたしがあなたの敵を

あなたの足もとに屈服させるときまで」と。』

³⁷このようにダビデ自身がメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアがダビデの子なのか。」大勢の群衆は、イエスの教えに喜んで耳を傾けた。

³⁸イエスは教えの中でこう言われた。「律法学者に気をつけなさい。彼らは、長い衣をまとって歩き回ることや、広場で挨拶されること、³⁹会堂では上席、宴会では上座に座ることを望み、⁴⁰また、やもめの家を食い物にし、見せかけの長い祈りをする。このような者たちは、人一倍厳しい裁きを受けることになる。」

⁴¹イエスは賽銭箱の向かいに座って、群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた。大勢の金持ちがたくさん入れていた。⁴²ところが、一人の貧しいやもめが来て、レプトン銅貨二枚、すなわち一クアドランスを入れた。⁴³イエスは、弟子たちを呼び寄せて言われた。「はっきり言うておく。この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。⁴⁴皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。」

だれよりもたくさん！【こども説教のために】

主イエスがおいでになられた神殿の境内には、伝承によるとラッパ型の口を設けられた13の賽銭箱（献金箱）が、女性も入ることが許されていた場所に置かれていました。ユダヤ人の男女は、そこに列をなして、定められたささげものを入れることになっていたのです。人々は皆、神殿のささげもの用に決められた銀貨をそこに投げ入れて行きました。金持ちたちは、さぞかしたくさんの銀貨を賽銭箱に投げ入れていたのでしょう。その様子を、主イエスご覧になられていました。

主イエスは、一人の貧しい身なりの女性が賽銭箱の前に進み出てくことに気づかれました。その人は、さい銭箱にレプトン銅貨二枚を投げ入れたのです。それはとても少額の銅貨でしたから、かえって目立ったのかもしれませんが、皆、見て見ぬふりをしたのでしょう。ところが、主イエスは、弟子たちをお呼びになり、その人のささげもののことをお話しになられたのです、「この人は、だれよりもたくさん入れた」と。

それは、その日のパン代にすることもできた銅貨でした。それを投げ入れてしまったその人は、もう自分を神にお委ねして頼るしかありません。神を信じ、愛していなければできないことです。これからご自分もそうなさろうとしていた主イエスは、きっと、その人から大きな勇気をもらったのです。

生活費を全部！

こどもの教会（教会学校）では、9月第一日曜日を「振起日」と呼んで、夏休みに遠ざかっていた子どもたちを呼び戻す行事をしていました。石神井教会では、この日に目の前の公園に行くのが定番でしたが、数年前からこれをやめてしまいました。この時期の暑さを考慮してのことでしたが、奉仕者にとっては、束の間、息をつく機会になったようです。奉仕者は、七～八月を通しての夏プログラムに取り組み、その仕上げとして一日の行事であるサマープログラムを実施するのに加えて、最近は学校からの紹介で来会する中高生が夏の時期に集中するので、その対応もしなければならないのです。怒涛の八月を終えて、奉仕者はようやく肩の荷を下ろした気分になっていることでしょう。

今年のサマープログラムは、先週日曜日の午後、実施いたしました。子どもたちの参加は11名でしたが、レギュラーメンバーに加えて初めての参加者もあり、ゆったりとしたプログラムを通していつの間にかお互いに打ち解け合うことができるのは、さすが子どもたちです。その参加者の中には、先月、生後一カ月で初めて礼拝に連れて来られ両親とそろって皆で祝福を祈った赤ん坊もありました。まだ首も座っていないようでしたが、賑やかな子どもたちに囲まれ、また抱っこしたがる大人たちにたらい回しにされながら、少しも臆することなく最初から最後まで一緒に過ごしてくれました。

子どもたちをわたしたちのただ中に迎えることができるのは、本当に幸いなことです。主イエスに触れていただく子どもたちを連れて来た人々を弟子たちが叱ったとき、主イエスは憤られて、「**子供たちをわたしのところに來させなさい。妨げてはならない**」（マルコ 10:14）とおっしゃられました。主イエスは、いつも子どもたちのような小さな存在を受け入れるべきであることをお教えだったのです。けれども、そのとき主イエスが子どもたちを招き寄せられたのは、それだけのことではなかったのでしょうか。「**子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない**」とおっしゃられたのです。子どもの姿は、わたしたちの模範なのです。

本当に自分では何もできない生後二か月足らずの赤ん坊は、何もわからずそこにいたのかもしれませんが、けれども、何もわからずとも、そこに居る者たちに自分の身をすべて委ねていたのです。委ねて頼るしかないからです。

それが、子の親に対する愛、というもののなのではないでしょうか。周囲に対する愛、というもののなのではないでしょうか。自分の生存のすべてを親の手に委ねて、自分を投げ出すのです。何も持たない自分の小さな存在を全部、人の手に委ねて、委ねた胸の内で自分自身であり続けるのです。そのような赤ん坊の姿こそ、神の国を受け入れた者の姿なのではないでしょうか。

キリストの恵みへ！

子どもたちと共に歩むとき、わたしたち大人は実は大いなる勘違いをしているのではないと思わされることが少なくありません。

わたしたちは、自分が大人であり、知恵も能力も子どもたちに優る者であると思っているのでしょうか。だから、わたしたちは子どもたちを愛すべきだと考え、彼らのために何かをしてあげること、与えること、教え導くことを熱心に考えます。見返りが無くても無償の愛を子どもたちに向けることが、御心にかなったことだと信じています。

もちろん、それは貴いことです。子どもたちのための活動をしてくださったり、多くのものをささげてくださる方の存在は、他に代え難いものがあります。わたしたちの誰も、それを怠ってよいとは思いません。皆が熱心にそうすべきだとも思います。

けれども、それは、「愛すること」の半分に過ぎないのではないのでしょうか。

主イエスは、律法学者との対話で、最も重要な掟は「あなたの主なる神を愛し、隣人を自分のように愛すること」だとお教えでした(マルコ 12:28~34)。その律法学者はその教えに同意したので、主イエスは、「**あなたは、神の国から遠くない**」(同 34 節)とおっしゃったのです。しかし、「あなたは、神の国に入ることができる」とはおっしゃられませんでした。彼らには、『聖書』の知識があったからです。彼らには、人の前で堂々と振る舞い、敬虔な信仰者らしく祈ることができたからです。彼らは、大勢の金持ちたちと同じでした。持てる者として、神に十分にささげ、人々によく与えることができる。それが、習い性になっていました。

主イエスは、神殿の饗錢箱の前で、レプトン銅貨二枚を投げ入れた一人の人を見て、言われるのです、「**皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れた**」と。

「そこに愛はあるのか」と、主イエスは問われたのではないのでしょうか。

「あなたの主なる神を愛し、隣人を自分のように愛しなさい」。そうお教えになられた主イエスは、ご自身、その愛をまっとうされるために、道を先に進まれました。人々の手に渡され、神の御もとに引き渡される道を、進み行かれました。愛をまっとうされるために、主イエスは、最後、慈善活動をなさったわけではありません。ただ、ご自身のすべてを、その存在を、命を、人の手に委ねられました。神の御手に委ねられました。

「愛すること」の半分は、委ねることです。わたしたちに十分な恵みをお与えくださっているお方、神に委ねること。神が与えてくださった周囲の者に自分を託すこと。そうなさった主イエスの愛が、すべてを**恵み**として喜び生きる道へと、わたしたちを招き入れてくださったのです。